石井英夫さんの己を捨てた功名心

吉田信行
元産経新聞論説委員長

新聞記者は「功名主義者」

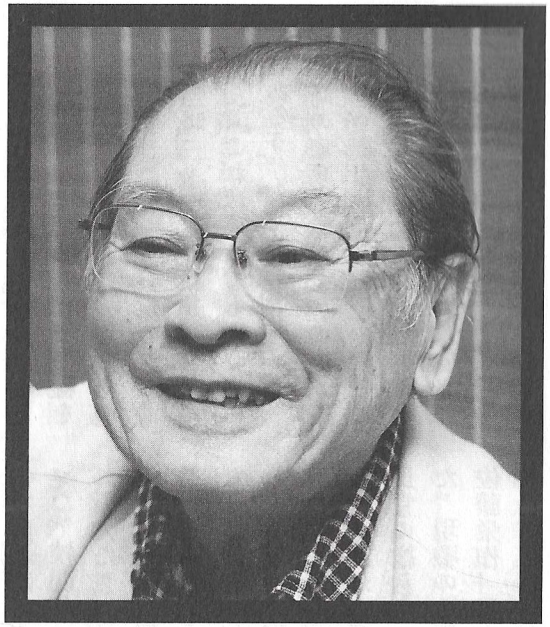
およそ新聞記者だと名乗る種族というものは、戦国の世で言えば敵陣深く真っ先に斬り込み、一番槍の手柄を立てることを夢みる「功名主義者」の現代版である。

事件記者であれ、政治記者であれ、国際報道に携わる記者であれ、功名心の塊である。誰もが知らないうちに真犯人に繋がる情報を得ることに事件記者は血道を上げ、政治記者は政府や政党が密かに進めている重要人事や政策の発掘に日夜奮闘する。国際記者なら、紛争や話題の種になりそうな人の動きや密約を暴こうと躍起になる。どれもこれも功名心のなせる業といっていい。

しかし、功名心はなかなかに曲者でもある。時折、大誤報が生まれるのも、あるいは世の顰蹙を買うような手法で記者なら誰でも欲しがる特ダネを仕入れたものの最後は法廷に引き摺り出されたりするのも、功名心の持つ毒性といえよう。

最近ではSNSの普及もあって、ここで登録者数を拡大させるには知名度を上げるに越したことはないとばかりに、記者会見の場で特異な質問を連発して注目を集める新聞記者も現れているが、これなども功名心といえば功名心の一種であろう。功名心も良いのか悪いのか、多角経営を始めたのかもしれない。

昨年（二〇二四年）十二月十八日に、「亡くなっても誰にも知らせるな。葬儀は身内だけでしてくれ」と家族に言い遺して、九十一歳の生涯を閉じた「産経抄」の石井英夫さんも新聞記者だった。



記者なら功名心の持ち主であるはずだし、肩書きが論説委員だったとしても、論説委員にも己の書いた論説記事が世を少しでも良き方に導く契機となれば、といった形の功名心がないといったら嘘になろう。では、石井さんはどんな功名心の持ち主だったのだろうか。その一点を考えてみたい。

石井英夫さんは、社内で先輩や同僚から「ケロちゃん」と呼ばれていた。風貌がどこかの製薬会社の蛙のキャラクターに似て、小柄で親しみやすい雰囲気を醸し出すがゆえの愛称だが、われわれ後輩からすれば雲の上の人のような仰ぎ見る存在で、「ちゃん」を「さん」に置き換えたところで、とても「ケロさん」などと呼べる筋合いのものではなかった。

若い時からレジェンド、つまり伝説の人だったのである。

私は昭和三十九年（一九六四年）の東京五輪時の入社で四月に入社したのだが、半年後の十月の東京五輪開催時点でわれわれ新人たちは編集局の校閲部に回され、一日中ナマの原稿と印刷されたゲラの読み合わせに追われていた。お陰で、せっかくの開会式や競技のテレビ中継を観るいとまもなかったが、開会式の模様はゲラで知った。

「鐘が鳴る。鳴りわたる」で始まるサンケイ（当時）の夕刊一面は後世の語り草で、私の後輩で論説委員にな

ったS君などは当時学生だったが、この開会式の記事に感動して産経を受験する気になったと語っていたのを思い出す。これを書いたのが、他ならぬ当時三十一歳の石井英夫さんであった。これはいまでもあり得ぬことであろう。

この時の東京五輪は令和の東京五輪とは全く異なり、終戦後の焼け跡から二十年を経ずして迎えた復興のシンボルたる国家的大事業であった。各メディアも総力をあげて迎えた開会式であり、それを飾る大事極まりない記事を、産経は入社十年にも満たない若い石井記者の腕に託したのである。

無論、すでにその時までに選ばれるだけの文章家であることを実績として示していなければ、そういうことにはなるまい。

実際、石井さんは頭抜けた存在だった。校閲部に回される前、われわれ新人たちは社会部に実習生として仮配属され、警察まわりの事件記者や、遊軍という即時対応部隊の記者たちに教えを乞うと同時に、先輩たちの一挙手一投足を眺めたりもしていた。

時あたかも昭和三十九年七月、自民党の総裁選が行われようとしていた。現職の池田勇人首相に対して、佐藤栄作、藤山愛一郎、灘尾弘吉の三氏が対抗馬として立っていた。

産経の社会部長は青木彰さんで、社会部としてもこの四氏を人物論として掲載したい、と言い出した。そこで同数の四人の記者を指名し、それぞれマンツーマンでの原稿執筆を命じた。若手ながら石井さんも選ばれた。

青木部長は女優の佐々木すみ江さんを妻に迎えた人ながら、そこからくるイメージとは違ってすこぶる威厳のある顔付きの大柄な人で、近寄り難い部長として君臨していた。

のちに筑波大学教授として多くのマスコミ人を送り出した人でもあるが、当時から原稿の出来不出来に実にシビアな部長で、傍から見ても指名された四人の記者たちが気の毒に見えた。対象の人物の本質を捕まえていないと言っては、何度も書き直しを命ずるからである。

「これじゃダメだ」と四度も突き返されたベテラン記者を脇目に、最初にパスをしたのが一番若い石井さんであった。これには新人一同、一様に驚き刮目した。

六十年も前の話だが、これが私にとって石井英夫さんの凄さを目に焼

きつけた最初の風景であった。それゆえ、その後の五輪開会式の栄えある記事を任されたのが石井さんであってもそれほど驚きはなかったのだが、驚かされるのはむしろ、そうした自慢話をその後もいっさい受け付けず、口にもしない石井さんの人柄である。

鋭い感性とケンカ上手

石井さんは東京五輪の五年後、昭和四十四年（一九六九年）に、三十六歳で政治部出身の俵孝太郎さん（のちの政治評論家）を押し退ける形で「サンケイ抄」（いまは「産経抄」）の担当者に抜擢された。

爾来、ひたすら書き続け、昭和を越え、平成十六年（二〇〇四年）まで三十五年間の長きにわたって、週に一度、代筆に委ねる以外はほぼ毎日のように原稿用紙に鉛筆を走らせたのであった。

この間、昭和六十三年（一九八八年）には日本記者クラブ賞、平成四年（一九九二年）に菊池寛賞を受賞し、この時点で論説委員であった石井さんの存在と令名は新聞界を超えて知れ渡っていた。

そのまさに直後の時期、つまり平成六年（一九九四年）に若輩、といっても五十二歳になっていた私は計らずも石井さんの形式上の上司になる論説委員長に就任したというべきか、就任させられたのである。居心地の悪さを想像されたい。

最初の六年ほどは旧ビルで、残り四年は新ビルで、同じように机に書籍や資料を無秩序（に見えた）に積み上げたなかで、まるで埋もれるようにして「産経抄」を書き続ける石井さんの後ろ姿を、私は五、六メートルほど隔てて十年ほど見続けてきた。

論説委員というのは、午前の会議が終わるとみんなどこかへ消え去ってしまい、午後の早い時間帯に部屋に残るのは、締め切りが早い「産経抄」の筆者たる石井さんと、「主張」（社説）が手元にくるのを待つだけの論説委員長たる私ぐらいしかいないのである。必然的に、私は〝石井ウォッチャー〟になった。これがなかなかの見ものであった。

石井さんはふだん穏やかな人格者なのだが、そう見えて結構ケンカ早いのである。クレーム電話なら「いま締め切りに追われているので、切ります」とか言って逃げるのが新聞記者の常套手段だが、石井さんは結構付き合って口喧嘩に応じてしまう。

これが政治家からのクレームとなると、一段と声を張り上げて、相手が引っ込むまで戦うのであった。意外な一面であった。何のために、誰

のために戦っているのか。自分のためなのか。

石井さんはケンカの論理だけでなく、鋭い感性の持ち主でもあった。平成十三年（二〇〇一年）七月の午前の論説全体会議のことだったが、ベトナムのハノイでの日中外相会談が議題に上がった。小泉純一郎首相（以下、いずれも当時）が八月十五日に靖國神社参拝を計画していることに関して、中国の唐家璇外相が会談のあと日本側の記者団に対し、「（田中眞紀子外相に）やめなさいと言明しました」と日本語で語ったことが議題に取り上げられた。

誰しも中国の外相なら言い出しそうなことで終わりそうだったが、その時、石井さんが口を挟んだ。「私は、その『言明』というのは『厳命』というのが本当ではないかと思う」。この一言に、私の背中に電流が走ったことを思い起こす。彼我の外交の力量の差を暗喩する見事な指摘ではないか。だが、石井さんは決め付けず、自分の「産経抄」には「ゲンメイ」とカタカナで表記している。脱帽であった。

無償の功名主義者

産経出身の作家、司馬遼太郎さんが「産経抄」の愛読者であったことは広く知られている。司馬さんの石井評は「人の手の温もりが感じられる文章が書けるのは戦後では井伏鱒二と石井英夫さんの二人です」とするとてつもなく高いもので、よく周囲に語ってもいた。

「台湾紀行」の執筆のため台湾を訪れた司馬さんに、当時台北支局長をしていた私も直接聞いたことがある。

その司馬さんには、新聞記者を伊賀忍者になぞらえた理想像がある。こう書いている。

「私のなかにある新聞記者としての理想像はむかしの記者の多くがそうであったように、職業的な出世をのぞまず、自分の仕事に異常な情熱をかけ、しかもその功名は決してむくいられる所はない。紙面に出たばあいはすべて無名であり、特ダネをとったところで、物質的になんのむくいもない。無償の功名主義こそ新聞記者の理想だし、同時に現実でもあるが、これから発想して伊賀の伝書などを読むと、かれらの職業心理がよく理解できるような気がしてきた」（「歴史と小説」）

伊賀の忍者という職業集団を見ていて、彼らは司馬さん自身がそうであった新聞記者の集団と同一なので

はないか、と目が覚めるような思いで我に返ったというのである。

しかし、冒頭に記した如く、いまや新聞記者もいろいろである。功名主義も多角化している。そのなかで石井英夫さんこそは、司馬さんのいう「無償の功名主義者」として最も原型に近い人だったのではあるまいか。

石井さんの自慢は「二十二歳の時から五十三年間産経にお世話になったが、一度も長のつく立場には就かなかった」ということであり、文字どおり「生涯一記者」を貫き通したのであった。三十五年間も書き続けてきた「産経抄」も無署名のコラムであった。

私は途中からまたもや計らずも役員になり、それゆえ知ったことだが、役員会で「石井さんの待遇をアップしたいと持ちかけたのだが、どうしても固辞されて上手くいかなかった」という報告を耳にした時、石井さんらしいな、としみじみ感じ入ったものである。

戦後社会の洗濯と日干し

では、いったい石井さんの生き甲斐はなんであったのだろうか、何のために戦ってきたのであろうか。昼間は産経の防人として健筆を振るう石井さんも、夜は軽妙な粋人となって巷での談論風発のひとときを楽しみにしていた。

ひところ、なぜかヘアが解禁になったことがあって、これを無邪気に喜んだ石井さんは週刊誌のグラビアを見比べながら、真顔になって「これはもう少し刈り込んだほうがいいな」などと論評しては周囲の笑いを誘ったりもしていたが、いくら座談の名手であっても、無論こうした酒席が主たる生き甲斐であったであろうはずがない。

石井さんの生き甲斐とは、ずばり戦後の日本社会の洗濯と日干しにあったのではあるまいか。その担い手たる媒体として最も相応しいと信じていたのが産経であり、それゆえにわがことよりも産経の存在感を高めるという己を捨てた功名心が「産経抄」を書く石井さんの心中に秘められていたエネルギーの正体だったように私には思える。

換言すれば、自分の「名」ではなく、産経の「名誉」のために戦っていたのが石井さんの功「名」心の核心だったと確信する。

うれしい知らせがある。これを知ったら、泉下の石井さんもきっと酔眼から覚めて改めて祝杯を挙げるに違いない。それは、石井さんの訃報

が報じられた直後の昨年十二月三十一日付「アゴラ言論プラットホーム」に寄せられた高橋克己さんという在野の近現代史研究家を名乗る人の手になる石井さんへのオマージュである。

三十年前から産経を読み出したという高橋さんだが、産経を選んだのは朝刊だけの新聞のほうがゴミ出しに便利という理由だったという。

だが、読み出していくうちに「それにしても『産経』の紙面は刺激的だった」という高橋さんは、「『朝日』と比べて下さい。日本を危うくする論調に良識をもって立ち向かう産経新聞」という産経のキャッチコピーにも賛同するようになる。

そしてそのうえで、自ら「『産経』は時代の風のみならず、筆者の歴史観やものの見方をも変えてしまった。同紙の『正論』欄と『産経抄』に別人にされた格好だ」とまで告白しているのである。

それだけではない。最後には「『正論』を読み、また石井（敬称略）の『産経抄』をノートに書き写して、彼の当意即妙の文章や言葉遣い、そして社会現象の捉え方などを学んだ」とまで書き残してくれているのであった。

どうです、石井さん、嬉しいじゃありませんか。これこそが、「無償」のコラムニストである石井さんが唯一手に入れようとしていた本当の宝物ではないですか。この高橋さんのような人は他にもいるはずだし、百人また百人と増えていけば、戦後社会の洗濯に繋がっていく、と私は信じたいのである。

石井さんの最期は論説委員室で語っていたものとは異なり、老人ホームで近親者のみに見送られたと聞く。

いつだったか、あの書物の山が崩れ落ちそうになっている自分のデスクを背にして、「死ぬ時はね、この机のうえで鉛筆を握り締めながら、バタッと倒れて、それでお仕舞い、っていうのがいいよなあ」と、誰に語りかけるでもなく喋り出していた石井さんの在りし日の姿が瞼に焼き付いて離れない。

それが産経を真から愛していた石井さんの偽らざる本音だったように思われるし、本当にそうさせてあげたかったと、いまにして思うのである。

よしだ のぶゆき
一九四一年、東京都生まれ、早稲田大学第一政経学部政治学科卒。六四年、産経新聞社入社。政治部、ソウル特派員、台北支局長を経て、九四～二〇〇五年論説委員長。退社後、二〇〇五～一〇年、国家公安委員を二期務めた。著書に『産経新聞と朝日新聞』（産経新聞出版）など。

産経新聞の宝であり シンボルだった石井さん

宮城晴昭
月刊『Hanada』顧問

ゴーグルのなかに涙が

石井英夫さんの訃報を知ったのは、息子さんからのメールでした。

私は石井さんに不定期に、たとえばひょっこり出てきた昔の産経抄だとか、大石静さんが出た『文藝春秋』のグラビア記事だとか、あるいは舞の海さんなど石井さんと交流のあった人たちの新聞や雑誌の記事のコピーを――目が悪くなられたので拡大コピーを――、石井さんに送っていました。

昨年末にお送りし、十二月二十九日だったと記憶していますが、息子さんからメールがあって、「実は父は十二月十八日に亡くなり、二十三日に葬儀をしました」と教えられました。

「誰にも知らせるな」「葬儀はするな」「香典をもらうな」と遺言があったそうですが、しかし私の立場としては、産経新聞の後輩に恥をかかすわけにいかない。だから、「榊原（智）論説委員長に伝えます」と伝え、榊原さんにメールをしました。翌三十日に、産経抄はじめ各紙にも訃報や追悼記事が載りました。

別に私が何かしたわけではないんですが、どっと疲れてしまったので、その後の気分転換にジムのプールへ行ったのです。

そこで初めて、緊張の糸がほぐれ